



なかのじょう

# 群馬県中之条町「中之条ビエンナーレ」

アートと山里の融合による地域活性化

アーティストと役場職員で構成された実行委員会で開催するアートフェスティバルで、アートの発信と地域活性化を両立

映画「眠る男」「月とキャベツ」のロケ地として有名な中之条町。ひっそりとしたこの山里の町は、2年に1度、大きな盛り上がりを見せる。夏から秋にかけて開催される「中之条ビエンナーレ」は、この静かな町に滞在しながら作品制作に打ち込んでいたアーティスト6名の発意で始まった。このアートフェスティバルでは、廃校や古民家、倉庫、温泉などを会場として、アーティストが、美術館の展示スペースでは制作できない作品に挑戦するが、これに町の住民や商業者が協力することで、地域活性化につながっている。



出典)中之条町資料

また、町内にできた交流施設では、アーティストだけ

でなく、子どもや若者を含む住民が、いきいきと活躍する姿が見られる。

過疎に悩む町は、アートと山里の融合により、これまでになかった新しい経済成長をとげようとしている。この融合を実現した秘訣とは？そして町が目指す新しい経済成長の姿とは？

## 取り組み概要.....

### 取り組みの目的

中之条町でアートフェスティバルを開催することで、アーティストが作品を披露する機会を持つとともに、土地に根ざした作品を制作し展示することで、地域の魅力発信にもつなげる。

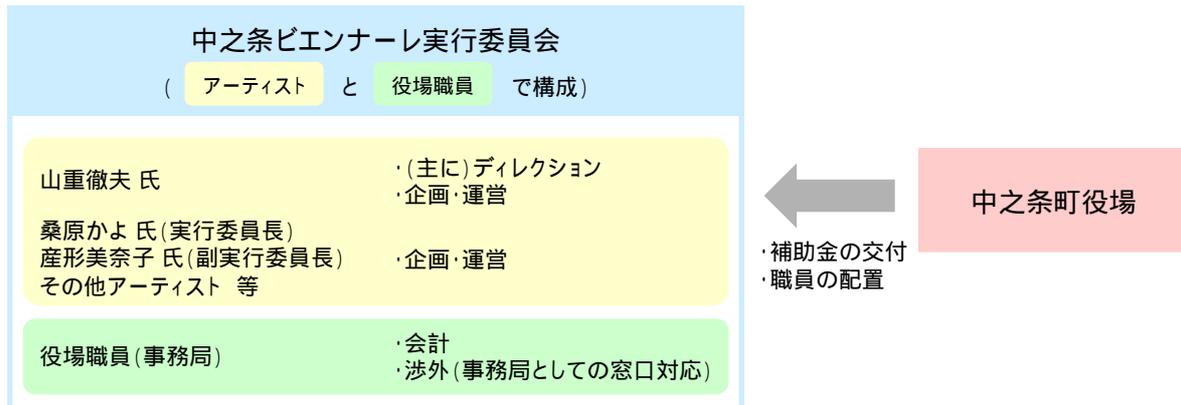
### 取り組みの内容

- ・中之条ビエンナーレの開催
- ・中之条町ふるさと交流センター「つむじ」を拠点としたクリエイティブシティへの取り組み

### 取り組み主体(中之条ビエンナーレについて) 2010年度現在

- ・中之条ビエンナーレ実行委員会
- ・中之条町役場

## 取り組み体制



## 取り組みのポイント

### 1. アーティストが町の魅力にふれるきっかけづくり

会場選定と作品の制作過程において、参加アーティストが町の魅力を知り、町民との親睦を深めることのできる「さりげない仕掛け」をすることで、町の魅力がアートと融合して発信されている。

### 2. 地場産業との連携による地域活性化

中之条ビエンナーレにおける来場者が、町の飲食店や温泉街を利用するよう、クーポン券の発行やHPでの温泉施設の情報発信を行うことで、地域活性化につなげている。

### 3. 実行委員会における官民でのメンバー構成

実行委員会のメンバーを、アーティストを中心として役場職員を加えることで、アーティストの考えを尊重した働きかけと、町民や地場産業との連携を、可能としている。

### 取り組みによる成果

- ・2007年で延べ4万8,000人、2009年で延べ16万6,000人の中之条ビエンナーレ来場者の獲得
- ・中之条ビエンナーレにおいて住民ボランティアの主体的な参画が見られた
- ・「つむじ」の「町民メーカー」の誕生
- ・アーティスト等9名の町への移住

### 今後の展望

- ・「中之条ビエンナーレ 2011」に向けた、実行委員会を含む体制強化、参加アーティスト・ボランティアへの手当での拡充
- ・協力者だった住民との関わりを深め、パートナーとしてアートのまちづくりに取り組む
- ・アーティスト等の移住を促進し、「クリエイティブシティ」を目指す

## 中之条町の概況

### 人口減少、高齢化が著しい

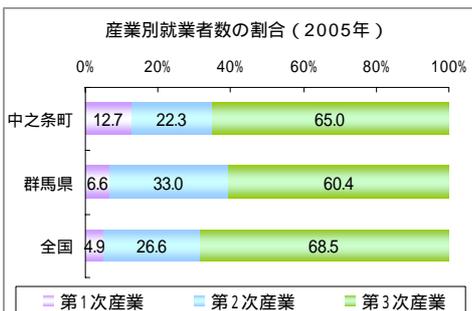
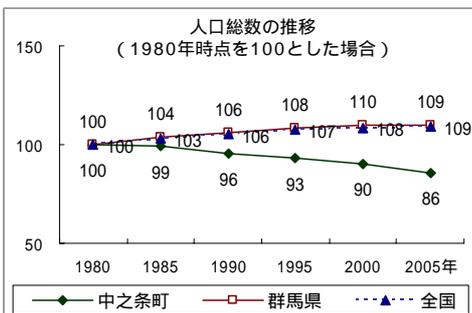
中之条町は、群馬県の北西部に位置する山間地で、8割以上を森林が占める盆地状の地形となっている。2010年には、六合村を編入した。

2005年の国勢調査によると、人口総数19,398人、一般世帯数6,765世帯。1980年からの人口推移を見ると、群馬県が増加しているのに対し、中之条町は減少している。高齢化率は30.0%と、群馬県や全国に比べて高くなっている。

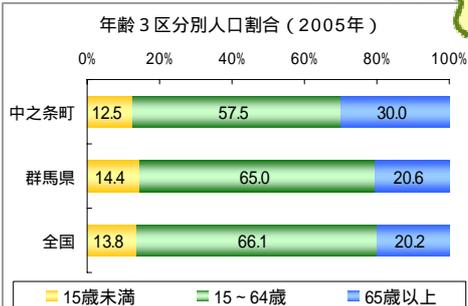
### 温泉・自然を拠点とした観光業が盛ん

産業別の就業者数の割合を見ると、第1次産業が12.7%と、群馬県や全国と比べて高くなっている。農業では、米・こんにゃく・野菜・果樹など、様々な農産物を生産している。このほか、吾妻郡一円を商圈とする商業、電気機器製造業、観光業が、中之条町の主要産業となっている。

観光業では、四方・沢渡・尻焼などの温泉と野反湖などの自然を拠点としている。そのほか、日向見薬師堂や富沢家住宅、東谷風穴、重要伝統的建造物群保存地区の赤岩地区といった文化財も、歴史資源として残されている。



<中之条町へのアクセス>  
電車の場合  
東京駅から高崎経由で中之条駅まで約2時間  
車の場合  
練馬ICから渋川IC経由で2時間



出典) 中之条町 HP  
<http://www.town.nakanojo.gunma.jp/2-qenki/acsess/info.shtml> (2011/3/25 参照)

## 取り組みに至る経緯

### 吾妻美学校の設立

1995年、群馬県の人口が200万人を突破したことを記念して制作された、映画「眠る男」。そのメインロケ地に選ばれたのが中之条町である。この時の監督、小栗康平氏の友人である日本画家 平松礼二氏が、1998年に中之条町に開校したのが、「吾妻美学校」である。吾妻美学校では、多摩美術大学の卒業生を中心に、2年間を1期として、平松氏による指導や作品制作に没頭できる閑静な場を提供していた。また、町民との交流を深めるため、祭りに生徒が参加したり、町民を対象とした平松氏による講座も開催された。しかし、その生徒数は年々減少していき、1998年に17名だったのが、2006年(5期生)には6名となっていた。

吾妻美学校では、終了時に2年間の集大成として、東京の銀座での共同展を開催していた。しかし、この6名の5期生は、中之条町で制作した作品を東京で展示することに疑問を感じていた。町への恩返しのためにも、町内で作品を発表し、町民に見てもらいたい。

しかし、約 2 万人の町民に発表するには 6 名の作品では足りない。それなら規模を大きくしてアートフェスティバルを開催しよう。これが、「中之条ビエンナーレ」の始まりである。

### 「越後妻有アートトリエンナーレ」との出会い

彼らが構想したアートフェスティバルとは、都市や地域の空間全体を大きな美術館としてアート作品を展示するものである。現在、国内の様々な地域で同様の催しが開催されているが、イタリア・ベネチアの国際展の知名度が高いことから、アートフェスティバルを開催している大半の地域ではイタリア語の「ビエンナーレ」(2年に1度開催)、「トリエンナーレ」(3年に1度開催)を名称に用いている。

これを中之条町で開催するには、町の協力が不可欠であった。そこで、5 期生は役場を訪れ、中之条町でのアートフェスティバル開催を提案した。その際に、国内での事例として彼らがとりあげたのが「越後妻有アートトリエンナーレ」である。これは、2000 年より、越後妻有地域(新潟県十日町市、津南町)で開催されているアートフェスティバルで、田畑・民家・廃校などに、約 200 点に及ぶアート作品を展示するもの。アートを活

用して地域の魅力を発信し活性化を目指すこの取り組みは、毎回多くの来場者を集めている。

これをやりたいという 5 期生に対し、「百聞は一見にしかず」ということで、入内島道隆町長、役場職員、5 期生で、「越後妻有アートトリエンナーレ」の視察を行った。この時の感想を入内島町長は次のように語っている。「アート作品と田舎の風景が互いを際立たせていた。これと同じ事ができるなら是非やってほしいと思いました。」こうして、中之条町でのアートフェスティバルの開催に向け、6 名のアーティストと役場の奮闘が始まった。

### アーティストによる実行委員会の設立

早速、2007 年 4 月に 6 名の 5 期生(山重徹夫氏、西田真実氏、産形美奈子氏、八幡幸子氏、武藤康子氏、上田圭一氏)が中心となって「中之条ビエンナーレ実行委員会」(以下、「実行委員会」)を設立。一方、町は、2007 年度の補助事業として 320 万円を予算計上し、開催を正式決定した。「ビエンナーレ」にしたのは、熱が冷めないうちに次を開催することで、継続する気持ちをもつためであった。



役所広司主演映画「眠る男」の撮影拠点となった「伊参スタジオ」。中学校の廃校舎を改装して使用された。これがきっかけとなり、1995 年には、山崎まさよし主演映画「月とキャベツ」の撮影拠点にもなった。



2001 年より始まった「伊参スタジオ映画祭」のチラシ。現在、「中之条ビエンナーレ」とともに、町のまちづくりの両輪となっている。中之条町のアートのまちづくりは、映画「眠る男」から始まったと言えるだろう。

## 現在の取り組み

この時すでに 9 月の開催まで残り半年を切っていたが、アートディレクション<sup>\*1</sup>や参加アーティストの確保を担う実行委員会と、受付の住民ボランティアの確保やトップセールスでの情報発信を担う中之条町の連携により準備を進め、2007 年 9～10 月に、「中之条ビエンナーレ 2007」を開催した。58 名のアーティストが参加し、廃校や古民家、地域の集会所、元酒蔵など、地域の未使用施設 11 箇所を会場として作品を展示、入場無料で開催された。また、アーティストによるワークショップや小作品の販売、住民による漬物・おやきの販売も行われた。

2 年後の 2009 年には、実行委員会は、町や県などから 650 万円の補助金を受け、企画・運営内容を充実。具体的には、多種多様なアート作品を展示するため参加アーティストを公募、また、地域活性化に向け、商店街と温泉地に展示場所を拡大した。さらに、来場者の利便性の向上を図るため、ガイドブックを制作・販売、バスツアーも実施した。結果、参加アーティスト 112 名を確保、29 箇所の会場で、「中之条ビエンナーレ 2009」を開催、第 1 回を上回る来場者数を記録した。



「中之条ビエンナーレ 2007」の様子  
当初 2008 年開催の意見もあったが、5 期生達の「鉄は熱いうちに打て」という思いで 2007 年開催にふみきった。この熱意に応じて、役場職員も深夜まで看板設置にかかるなどした。

現在、中之条町では、「中之条ビエンナーレ 2011」に向けた準備が進められている。これまで、アートディレクションは、実行委員会が務めてきたが、2011 年は、実行委員会の中でも中心となってディレクションを行っていた山重氏が総合ディレクターという位置づけとなり、実行委員会・総合ディレクター・中之条町で連携し、アーティストの参加と住民を中心としたボランティアの協力を受けて開催する。実行委員会に対しては町から補助金を交付、総合ディレクターの山重氏には実行委員会がアートディレクションを委託する予定である。

\*1 コンセプトにもとづいて企画・立案し、準備から開催に至るまで指揮・監督すること



「中之条ビエンナーレ 2009」の様子  
2007 年の開催では、町全体に周知することはできなかったが、2009 年の開催後には、高齢者でも「ビエンナーレ」という横文字を知っているほど周知が進んだという。

## 「中之条ビエンナーレ 2011」の準備・開催

「中之条ビエンナーレ 2011」は 2011 年 8 月 20 日～10 月 2 日の日程で、これまでと同様に入場無料で、作品展示・ワークショップ・小作品の販売が行われる。

開催準備は 2010 年 4 月より開始。まず、実行委員会で作品を展示する候補地を選定。次に、参加アーティストを募集し、ポートフォリオ等で選考する。これを通過したアーティストに対し、会場の下見・説明を行い、作品の展示希望場所を提出してもらう。その後、実行委員会で展示場所の調整を行い、その結果を 10～12 月に各アーティストに連絡、それを承諾した時点で正式な参加決定となる。アーティストに対しては、滞在制作や会期中の宿泊の場として、旧キャンプ場を無料開放。但し、作品制作・搬入費用、交通費、滞在中の食費は原則、すべて自己負担となっている。



## 「アートのまちづくり拠点「つむじ」の運営

2010 年度からは、中之条町をアートの町にするため、ビエンナーレ以外にもアート事業を展開している。その拠点となっているのが、2010 年 7 月にオープンした、町営の中之条町ふるさと交流センター「つむじ」である(総事業費 3 億 5,000 万円。まちづくり交付金を活用。)。町は、ここをクリエイティブなまちづくりの拠点とするため、山重氏にプロデュースを委託、実行委員会のメンバーが町の嘱託職員となって「つむじ」の運営を担っている。

この「つむじ」を拠点として、ビエンナーレを小規模にした「温泉郷美術祭」、ライブやパフォーマンス、アーティストによるワークショップといったイベント等を展開。また、「つむじ」では、「ニッポンのものづくりを考える場所」をコンセプトとして、町民が制作した生活雑貨・伝統工芸品・地場産品、アーティストが制作した雑貨、地元の食材を活用した飲食物等を販売している。

「中之条ビエンナーレ 2011」のチラシ  
参加アーティストへの会場の下見・説明は、開催前年度の夏に実施された。季節によって、景観の見え方が全く異なるため、本番に近い環境を見せるためである。

出典) 中之条町資料



### 「つむじ」

S 字型の建物の中には、アーティストが手がけるおしゃれなカフェやショップなどがある。町民が制作した商品や町の飲食店のテナントも見られ、アーティストと町民がともに活躍する場所となっている。

出典)「つむじ」HP <http://tsu-mu-ji.com/wp/> (2011/3/25 参照)

## 取り組みのポイント

### アーティストが町の魅力に触れる きっかけづくり

中之条ビエンナーレでは、ただ町内にアート作品を展示するのではなく、アートを通じて町の魅力が引き出されるよう、会場選定や作品の制作過程において、工夫がなされている。

作品を展示する会場選定にあたっては、実行委員会で、中心街である商店街、山里の美しい景色を楽しめる<sup>たけやま</sup>嵩山、養蚕文化の歴史資源が残る養蚕地区、温泉地といった、町の歴史の足跡や面影の残る地区を候補地に選んでいる。しかし、候補地の中に参加アーティストが希望する場所がなかった場合には、アーティストからの会場の提案も受け付けている。この理由として、山重氏は、「作

家（アーティスト）はアンテナのようなもの。普通の人が見落としてしまうようなものも拾って見せてくれる。だから、ある程度は作家に任せています。」

また、作品の制作にあたっては、参加アーティストに滞在制作を勧めている。町に滞在して、町民と交流し、土地の文化や歴史を感じながら、制作にあたってもらうのがねらいである。とはいえ、町が行っているのは宿泊施設の無料開放のみである。アーティスト達は、それぞれのペースで、町民と親睦を深めて土地に溶け込み、その場所と向き合いながら制作にあたる。

このように、町の魅力に触れる「きっかけづくり」に徹し、アート作品の制作に関してはアーティストに委ねることで、町の魅力がアートと融合し発信されているのである。



中之条ビエンナーレ副実行委員長 / 「つむじ」ショップ担当  
<sup>うぶかたみ なこ</sup>  
産形美奈子 氏



2010年从中之条町に移住。中之条ビエンナーレでは、開催期間に入ってから「パフォーマンスがしたくなった」等、参加アーティストからの突発的な提案がよくあるが、なるべく受けるようにしているという。それが、事前に公表されるスケジュールにはない新鮮さをイベントに与えている。こうした対応も、アーティストならではの発想である。

### 「場所と向き合いながら制作して欲しい」

Q. 中之条ビエンナーレが、アートと町の魅力の発信になるよう、考えていることはありますか？

作品自体がまず良くなければいけないと考えています。「良い作品」といっても色々な考え方があると思いますが、この場所ではしか作れない、見られない作品が良いと考えていますし、ここでやる意味もそこにあると思います。参加アーティストにもそれを大事にして欲しいので、選考の段階では、それを念頭に置いています。また、滞在制作を勧めているのも、会場となる場所を見て、この場所とのつながりを考えてもらいながら制作して欲しいからです。作家が場所と向き合って、ここでしかできない作品をつくってくれば、必ず場所の魅力の発信につながると考えています。

Q. 産形さんにとって中之条の魅力は何ですか？

何か離れられない魅力があるんですね。町も自然も、規模がちょうどいいのかもしれない。自分がやっていることに対して、すごく実感があります。それは、私達の取り組みに対する反応を感じられたり、住民のみなさんからの支援による一体感があるからだと思います。「よそ者」だからこそ、自分の存在感を感じられるということもあるでしょうね。

### Point アーティストの育成

中之条ビエンナーレでは、アートを通じて地域振興を図るだけでなく、芸術文化の振興の一環として、アーティストの育成にも取り組んでいる。

アーティストが個展を開く場合、会場費や宣伝費などはすべて自己負担となるため、彼らにとってビエンナーレは、比較的安価で自分の作品を披露できる機会となっている。しかし、中之条ビエンナーレでは、それだけでなく、アーティストの育成につながるような取り組みを行っている。例えば、ギャラリーや画廊へのPRを行い、スタッフの誘客を図っている。スタッフの目にとまれば、ギャラリーや画廊での展示につながり、世に出るきっかけになる。また、2011年では、ギャラリー関係者を実行委員会が直接招待し、キュレーターなどが作品にふれる機会を確実にする動きもとる。さらに、「つむじ」で、アーティストの制作する生活雑貨を販売しているのは、彼らの収入の一助とするというねらいもある。

入内島町長は、「町がアーティストに一方的に力を貸してもらっただけでなく、我々もできることをしつつ、彼らが世に出るようになる仕組みができればと思う。」と語っており、今後アーティスト育成に関する施策を拡充することを検討している。町のこうした姿勢が、アーティストとの信頼関係を構築する一つのポイントと言えるだろう。

### 地場産業との連携による地域活性化

中之条ビエンナーレでは、町の魅力発信だけでなく地域活性化につながるよう、地場産業との連携も行われている。

町の大きな観光資源となっているのが温泉である。そこで、「美術+故郷+温泉」をコンセプトとして、温泉街との連携を積極的に図っている。作品を展示する会場に、露天風呂や足湯を選定するほか、会場が町内の広範囲にわたっていることを活かして、来場者に対し泊まりがけで来場することを勧めており、中之条ビエンナーレのHPでは温泉協会等へのリンクをはっている。また、2007年、2009年ともに、発行するガイドブックの裏表紙をスタンプラリーにして、各会場のスタンプを集めた人には、温泉旅館の宿泊割引券や無料券、日帰り入浴券がプレゼントされた。さらに、ガイドブックには、町内の飲食店舗の地図とクーポン券を掲載した。

このように、来場者が町の飲食店や温泉施設を利用するよう工夫されている。



「中之条ビエンナーレ 2009」のガイドブック裏表紙がスタンプラリーとなっている(左)。スタンプは、会場毎に違っており、そのかわいらしいデザインも来場者に好評だった。ガイドブックの中には、飲食店のクーポンが掲載されている(右)。ドリンクサービスや割引など、店舗毎にサービスを受けられる。

出典)中之条町資料

## 実行委員会における官民でのメンバー構成

アーティストの考えを尊重しながら町の魅力に触れるきっかけをつくり、地場産業との連携を図る。これを可能としているのが、実行委員会のメンバー構成である。中心メンバーはアーティストだが、これに事務局として役場職員も加わっている。

中之条ビエンナーレで山重氏が重視しているのは「アーティスト主導」という考え方。ビエンナーレのそもそもの目的は、アーティストにいかん楽しんで作品を制作し展示してもらおうかということ。これを重んじながらも、町の魅力発信につながるさりげない仕掛けができるのは、実行委員会の中心メンバーがアーティストだからこそである。

また、会場選定にあたっての土地や施設の所有者との交渉、住民ボランティア等の確保、温泉協会との連携を担っているのが、実行委員会事務局の役場職員である。彼らがいるからこそ、中之条ビエンナーレと町につながりができている。

こうした官民のメンバー構成により、町に根ざしたアートフェスティバルを実現しているのである。

## Point アーティストが手がける情報発信とは？

中之条ビエンナーレや「つむじ」を拠点とする取り組みにおける情報発信は、主に山重氏が手がけており、そこには、アーティストならではの工夫が施されている。例えば、ビエンナーレ HP では、普段アートに触れていない人にも興味を持って見てもらえるように、ビジュアル面を重視して画像を多用している。また、対外的な印刷物はブランド価値に大きく影響するとして、中之条ビエンナーレで作成されるガイドブックやチラシは、デザイン性の高いものになっている。これらのデザインは、山重氏が行っている。

発信方法についても、現在「つむじ」で行われているイベントやパフォーマンスはストリーミング配信しており、海外で見ている人もいるという。今後は、これだけでなく、雑誌等へ広告を掲載することで、これまでパブリシティ(マスコミに積極的に情報公開することで、報道されるよう働きかけること)に頼っていた発信方法も充実していくという。

このように、「魅せる」プロならではの、コンテンツ作成と発信方法における工夫が行われている。



「中之条ビエンナーレ」HP(左)と2009年のチラシ・ガイドブック(右)  
HPでは、トップページ、イベント情報、作品紹介などのページで、画像がふんだんに使用されている。ガイドブックでは、会場の概観の写真はあえてモノクロにしている。形を見せるために、色彩の情報を取り除いたのだという。これもアーティストならではのこだわりである。

出典「中之条ビエンナーレ」HP <http://www.bi-ku.com/nakanojo/index.html>(2011/3/25 参照)、中之条町資料

## 取り組みの成果

### 来場者による経済効果、住民の変化

中之条ビエンナーレは、2007年は延べ4万8,000人、2009年は延べ16万6,000人の来場者数を記録した。また、町では、もたらした経済効果を、2007年で3,000万円、2009年では2億2,000万円と推計している。

また、中之条ビエンナーレの開催を通じて町の魅力を発見したのは町外からの来場者だけでは

ない。中之条ビエンナーレには、多くの町民も訪れた。町民からは、多くの来場者が町を訪れたことを喜ぶ声のほか、自分達もアーティストによって町の魅力を再発見できた、自分達も知らなかった町のおもしろい場所に行くことができた、廃校や空き店舗などが会場になって懐かしい等の声が聞かれた。これも、アーティストが、町にインスピレーションを受けながら作品を制作したからこそその成果といえる。



中之条ビエンナーレ  
住民ボランティア  
さいきりいち  
齋木利一氏



齋木氏の地区では、現在でも、地域の祭りの際にアーティストが参加するなど、住民とアーティストの継続的な交流が続いている。2011年の開催に向けては、綿花をつかって何かできないかと構想中。

### 「ビエンナーレを地元で盛り上げよう」

Q. 中之条ビエンナーレでは、住民ボランティアとして、どのように協力されましたか？

ビエンナーレを地元で盛り上げようと、町の祭りを担っている住民を中心にボランティアをしました。私の地区では、若者も参加してくれて、来場者の誘導や飲食の販売をしました。地元の人が笑顔で対応することで、来場者は良い町だと思ってくれると思うので、そうした思いでお手伝いしました。

Q. 今後も、住民ボランティアとして協力していきたいと思われませんか？

中之条ビエンナーレが開催されることで、町内が多くの人でにぎわうのは嬉しいです。外の人に自分達の土地を見てもらえて嬉しかったですし、私達も普段は素通りしていた場所が会場になることで行くことができ楽しかったです。ビエンナーレは、単発ではないですから、来場者には満足していただき、また2年後に来て欲しいですね。2007年から2009年にむけて規模も拡大していますし、今後もボランティアとして協力したいと思います。

## 町民もアートのまちづくりの担い手に

中之条ビエンナーレでは、2007年は、11箇所の会場に300名の受付、2009年は、29箇所の会場に1,082名の受付が配置された。これを担ったのが、老人会や婦人会などの住民ボランティアで、当初の役割は、作品の監視とスタンプラリーの受付となっていた。しかし実際には、住民ボランティアの発意で、会場の案内や飲食の販売などのおもてなしが行われた。例えば、<sup>だいどう</sup>大道地区では、「手作り市」として、漬け物やおやきなどを販売。得られた収益をボランティアで配分し、余った分を活用して地域づくりの視察にも出かけた。<sup>おうしちやう</sup>王子町では、飲み物の販売を行うほか、住

民が作品を展示する小規模のアートフェスティバルも開催された。

さらに、「つむじ」には、雑貨ショップの利用やワークショップへの参加をきっかけに、自分の制作する雑貨や伝統工芸品（竹細工、草木染めなど）を商品として持ち込む町民が現れている。山重氏が「町民メーカー」と呼ぶ彼らは現在30名おり、中には「つむじ」への商品の出荷が生活の楽しみになっている町民もいるという。

アーティストの発意で役場との連携により始まったアートのまちづくりに対し、住民も重要な担い手として参画しつつある。



中之条ビエンナーレ  
住民ボランティア  
<sup>たむらしんこ</sup>  
田村仁子氏



初めは「ビエンナーレ」という聞きなれない言葉に戸惑ったそうだが、受付だけならと、婦人会で協力。「色々な人との会話は、自分の収穫になる」と話す。こうした住民ボランティアの気質が、ビエンナーレにあたたかみを与えている。

### 「作品を見て、エネルギーを分けてもらった」

Q. 中之条ビエンナーレにボランティアとして参加してみて、いかがでしたか？

婦人会の支部のメンバーで地元会場のお手伝いをしました。ボランティアをしていて、来場者との交流も楽しく、アーティストの方も気持ちのよい方が多くて面白かったです。アート作品は、感動するものもあれば、ぎょっとするものもあって、表現力は様々だと思いましたが、非日常を味わえて、エネルギーを分けてもらえた気がします。

Q. アートのまちづくりに、今後期待することを教えてください。

あまり関係ないかもしれませんが、今は、子どもが少ないので、若い世代が増えてくれたらいいなあと思います。今、移住するアーティストが出てきているのは、いいことではないでしょうか。ここに住んで制作するなら、その作品を見せて欲しいし交流したいですね。ビエンナーレは2年に1回ですが、住民としては、いつでも気軽にアートを楽しめる場があってもよいかと思います。

## 「アーティストが住む町」中之条町へ

山重氏と、中之条町の嘱託職員となって「つむじ」の運営を担っている実行委員会の数名は、町に生業ができたことで東京都や神奈川県などから町へ移住した。このほか、中之条ビエンナーレに参加したアーティストの中にも、町に移住する者が出てきている。こうして現在、9名のアーティスト等が町内に住んでいる。

また、中之条ビエンナーレをきっかけに、群馬県の地方新聞である上毛新聞<sup>じょうもう</sup>で、中之条町が「作家が移住する町」として取り上げられたことで、アーティスト等から移住したいという問い合わせが寄せられている。「つむじ」においても、「つむじ」内やその周辺で、ショップやブティックを開きたいという問い合わせが来ているという。

ヒトやモノが出会い、つながり、そこから何か新しいものが生まれる、それを伝えていくことで、また新たな出会いが生まれる。これは山重氏が描いているビジョンであるが、中之条ビエンナーレや「つむじ」が、この出会いの「場」となったことで、また新たな出会いが生まれようとしている。

## 今後の展望

### 組織としての取り組み体制の構築

6名のアーティストから始まった中之条町のアートのみちづくりは、その規模が拡大する中で、組織としての取り組み体制の構築が必要となっている。

「中之条ビエンナーレ 2011」の開催に向けて、実行委員会を含む体制強化や参加アーティストへの手当での拡充、新たなボランティアの確保とそれに対する手当が検討されている。

体制強化に向けては、実行委員会・総合ディレクター・中之条町の3主体による連携体制を構築する。これは、各主体の位置づけと役割を明確にすることで、それぞれの役割に専念できるようにすることをねらいとしている。



山重氏が描くビジョン「であう つながる うまれる つたえる」(上)と「つむじ」の「お祭り広場」「足湯」(下)  
「つむじ」で、様々なイベントを開催する「お祭り広場」や足湯を設置しているのも、こうした出会いの場とするためである。  
出典)「つむじ」HP <http://tsu-mu-ji.com/wp/> (2011/3/25 参照)

また、これまで宿泊費以外はすべて自己負担としてきた参加アーティストへの手当てを拡充するとともに、大学生を含む新たなボランティアを確保し、日当や交通宿泊費を手当てする予定となっている。

現在は、町や県などの補助金、個人・企業の協賛金が主な収入源となっているため、収益の獲得に向け、「中之条ビエンナーレ 2011」のパンフレットの内容を 2009 年より充実して販売、また 2007 年、2009 年のアート作品を図録にして販売する。収益獲得に向けては、入場料を有料にする案も検討されたが、住民も含めアートに興味のない人にも参加してもらえよう、無料を継続することにした。

## アーティストと住民の協働によるまちづくり

実行委員会・総合ディレクター・中之条町は、今後、アートのまちづくりに対する住民の関わりを深くしていきたいと考えている。

2007 年、2009 年の中之条ビエンナーレでは、住民ボランティアの依頼・調整を、役場が担っていた。「中之条ビエンナーレ 2011」では、参加アーティスト・実行委員会メンバーと、住民の交流を図ることで、中之条ビエンナーレと住民の関係を深め、住民ボランティアからの企画提案も受け付けて運営に活かしていく。

「つむじ」においては、30 名の「町民メーカー」が制作する商品のブランド化に取り組む。「町民メーカー」が制作した伝統工芸品などを「つむじ」が一度買い取り、商品がもつストーリー性を PR しデザインを加えてリパッケージすることで、ブランディングし、伝統文化の継承を図る。アーティストの中には、伝統工芸品を継承するため、町の職人に弟子入りする者も出てきている。

協力者であった住民は、アーティストと共に町の魅力を発信するパートナーへとになっていく。



「つむじ」の雑貨ショップに置いてある町民制作の伝統工芸品や生活雑貨  
左上の「入山メンバ」と「こんこんぞうり」は、2010 年に合併した六合村の伝統工芸品。職人の高齢化が進む中で、ものづくりの文化をたやさぬよう、手間に見合った適正価格での販売に取り組んでいく。

出典)「つむじ」HP [http://tsu-mu-ji.com/wp/?page\\_id=22](http://tsu-mu-ji.com/wp/?page_id=22)(2011/3/25 参照)

## Voice

中之条ピエンナーレ実行委員長 / 「つむじ」イベント担当

くわばら  
桑原かよ 氏



中之条町出身。2010年に実行委員長として、メンバーに加わったのを機に、東京からUターンを果たした。出身者である彼女がメンバーに加わったことで、中之条ピエンナーレと住民との交流が深まることが期待される。

## 「住民とのコミュニケーションを大事に」

Q. 実行委員会の体制についての考えを教えてください。

実行委員会のメンバーに入っている役場職員が、会計や対外的な交渉、窓口対応をしてくれているのは安心感があってありがたいと思っています。一方で、主にアーティストでメンバー構成しているからこそ、実行力を発揮して、ピエンナーレで来場者を獲得して、取り組みの規模も拡大できていると思います。

今後は、長期的に継続していくことを考えて、実行委員会の内部でも役割分担や協議の体制を整えていきたいと考えています。

Q. 「中之条ピエンナーレ 2011」に向けた課題を教えてください。

2009年までは、実行委員会と住民ボランティアのつながりが希薄でした。立ち上げのメンバーは、町のことをよく知らなかったし、作品の展示で手一杯ということもあって、ボランティアの依頼からシフトの調整まで、全面的に役場に頼っていました。今後は、住民の方々と事前にコミュニケーションをとっていく必要があると考えています。「実行委員会の顔が見えない」ということをなくしていきたいですね。

## 「クリエイティブシティ」中之条町を目指して

入内島町長と山重氏が中之条町の将来像として描くのは、「クリエイティブシティ」である。

移住するアーティストが出てきている中、アーティストに限らず、デザイナー、クリエイター、建築家等のクリエイティブな人々の移住を促進する。そして、彼らのまちづくりへの参画を促すことで、町の文化や歴史に根ざしたオンリーワンのまちづくりを進め、「クリエイティブシティ」を目指す。

「クリエイティブシティ（創造性）が新しい経済資源となり、成長の原動力になるのではないか」というのが、入内島町長の考えである。

また、山重氏は、前述の伝統工芸品のブランド化等を通じて、この町に元々あるものづくりの文化を発信していくことで活性化を図りたいと考えている。

これまでにない新たな成長を目指す町と、町のアイデンティティを大切にし、その魅力を引き出すアーティストが組めば、まちの新たな価値を生み出すことも夢ではない。



中之条町町長  
いりうちしまみちたか  
入内島道隆 氏



40歳の若さで町長となった。「アーティストと話していると自由な発想なので楽しい」と、柔軟な発想で、アーティストとの信頼関係を構築し、住民に対し新しいライフスタイルを提供していく。

## 「クリエイティビティは新しい経済資源」

Q. 中之条ビエンナーレで、多くの住民ボランティアの参加を獲得できたのは、なぜでしょうか？

中之条町には、太々神楽と獅子舞が27あるんです。小さな町でこれは大変珍しいことです。皆でずっと残そうという努力がないと残らないと思いますので、それだけ住民のまとまりがよい地域なのだと思います。住民ボランティアは、客観的にこの町を見ることはできませんが、マスコミ等できりあげられることで、自分達がしていることは評価されることなのだと分かって、協力が弾みがついているのではないのでしょうか。

Q. 中之条町の目指す将来像を教えてください。

現在は、物流の結節点が人を集積する力があると思いますが、次は、クリエイティビティという資源に人が集積すると考えています。現在、中之条ビエンナーレをはじめとするアートの取り組みの結果、移住するアーティストが出てきています。地方の過疎に悩む小さい町が、クリエイティビティという新しい経済資源を得ることで、今までとは異なる形で経済成長をとげるチャンスではないかと考えています。



中之条ビエンナーレ  
総合ディレクター  
やまひげつ お  
山重徹夫 氏



2010年から中之条町に移住。ビエンナーレに参加するアーティストは、地域に溶け込むのが上手というが、自身も例外ではない。祭りを取材していたつもりが、仲間に加えられたり、自宅の畑を近所の住民と一緒に耕して種まきしてくれたり、すっかり住民の一員となっている。ヒゲを蓄えていることから、「やまひげくん」という愛称で親しまれている。

## 「若者が楽しく住む場所をつくりたい」

Q. 山重さんが目指したい町の姿を教えてください。

今は、高齢者に対する予算がウェイトを占めていて、若者が働いて高齢者を支えていますよね。でも、若者が面白い・楽しいと思うまちづくりをしないと、町から出て行った若者は帰ってこないと思います。高齢者が楽しめる場所はたくさんあっても、若者が楽しめる場所はなかなかない。ですから、中之条町が、子どもから僕ら30代の若者までが主役になれる「つむじ」をつくったことは、とても良いことだと思います。自分達が楽しく住む場所を自分達でつくりたい。そういう思いでがんばっています。

Q. 山重さんにとっての中之条町の魅力とは？

人のおもしろさですね。照れ屋の僕でも、町民の方と立ち話で結構盛り上がります。

あと、中之条町は、商店街・養蚕地区・温泉街・旧六合村など、場所によって全く違う魅力があります。地域のアイデンティティが色濃く残っている、ひっそりとした「奥地」。その魅力を伝えたいと思って、中之条町HPのトップページをデザインする際、「奥の院 中之条」という言葉を使っています。